

幼 兒 教 育

第十九卷
第一號

大正八年一月一日發行

幼 兒 教 育 と 自 然 科

文學博士

澤 柳 政 太 郎

現行令によると幼稚園の保育事項は遊戯、唱歌手技、談話といふことになつて居る。これは勿論究屈に考ふべきことではなく、又いろ／＼の新らしい工夫も行はれて居ることと思ふが、私が豫て考へて居ることは自然科を加へたいといふことである。自然科といふのは、或は理科と言つてもよいが、つまり自然界の事實について教へたいのである。而して、此の考へは、何も今日の普通の理科奨勵論の様に、時局から促されたことではない。もつと深い、又一般的根據に基くものである。従つてこれを何歳位から課すべきかといふことに於ても色々の論がある様である。今日普通には小學校の

五年になつて始めることになつて居る。それに對しても説がまち／＼で、或は三年四年から始めるが善いといふ説もあり、もつと早く一年生から始めるがよいといふ説もあつて一定しない。いづれにしても根據があつて言つて居るのではない。ただ何となく早い方がよいとか、餘り早過ぎるとか言つて居るに過ぎない。しかも眞に此の主張の根據に基いて言へば、成るべく早く始め度いので、私の成城小學校では尋常一年から自然科を課して居る。否もつと早く、學齡前から始め度いと思ふのである。

學齡前の教育は、家庭でも幼稚園でも、從來普

通に謂ふ處の、所謂學科的知識を與ふる必要もなく、又與ふべきでもない。それよりも動物界なり植物界の自然の事實そのもの、知識を與へ度いし、又之れならば充分與へることが出来る。それも從來所謂直観とか觀察とかいつて、たゞ見せるといふことだけに止まらず、相當にまとまつた（但しどこ迄も事實に即いた）知識として教へることが出来るし、又さうし度いと思ふ。

但し斯ういふことは、教育の目的から考へるばかりでなく、幼兒自身の欲求が實にこゝにあるのである。まだ學齡に達しない幼い子供の最も強く欲求するものは、乳、菓子といった様な直接生存に關するものを除いて、謂はゞ彼等の精神生活ともいふべき方面のものとしては、蓋し自然界が一番である。殊にモー／＼とかヒン／＼とか、チュウ／＼、ワン／＼といふ具合に動物に對しては最も強い欲求と興味とを持つて居る。草の花とか葉とか植物に對しても同じである。そこを利用して、

その欲求に満足を與へて、此の時期にふさはしい教育を與へ度いのである。

而して、幼兒の欲求に充分の満足を與へて自然に關する知識を與へて行かうといふには、母なり保母なりが、先づ充分自然に對する正確な知識を持たなければならぬ。そして家庭ならば、時に觸れ折に觸れ、此の教育を行つたならば、學齡期の教育として極く適當などであると思ふ。更に幼稚園に於ては、たゞ時に觸れ折に觸れといふ風ばかりでなく、立案的に此の教育を施したいと思ふ。之れが爲には、幼稚園の此の教育の設備即ち自然を豊富ならしむることも大切であらうしその他如何にして此の目的を徹底させるかに就て幼稚園教育者諸君の充分の御研究を希望するのである。（文責記者）